

## 「罪への誘惑」

2022年03月11日

「また、私を信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、ろばの挽く石臼を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまうほうがはるかによい。」(マルコ福音書9章42節)

「人は皆、火で塩気を付けられねばならない。塩は良いものである。だが、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは何によって塩に味を付けるのか。自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ぎなさい。」(マルコ福音書9章49節～50節)

主イエスの小さい者、弱い者への言葉と振る舞いは、限りなく優しい。「また、私を信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、ろばの挽く石臼を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまうほうがはるかによい。」小さい者は弱々しく生きざるを得ないが、その生きる道を遮り、邪魔する者は、石臼を首に懸けて海に投げ込めと言われる。石臼は、家畜に挽かせる大きなものから、手で回す小さなものまでであるが、ろばが挽く大きな石臼を首に懸け、海に沈めよと、厳しい死を宣告している。当時、罪を犯した者に石臼を懸け、死刑にする処罰があったらしい。残酷な刑罰であるが、主イエスは、小さい者をつまずかせる者は、そのような裁きを受けるほうがはるかによいと語っておられる。

更に、つまずかせる者は、どんな犠牲を払っても、つまずかせる部分を切り捨てよと言われる。もし、片方の手がつまずかせるなら、それを、切り捨てなさい。両手がそろったままゲヘナの消えない火の中に落ちるよりは、片手になって命に入るほうがよい。「ゲヘナ」は、ヒンサム谷を意味するゲーヒンノームを語源とするギリシア語で「永遠の滅びを与える地獄の燃え続ける炉」で、「命に入る」は世の終わりに神から与えられる命である。また、もし片方の足がつまずかせるなら、切り捨てなさい。両足がそろったままゲヘナへ投げ込まれるよりは、片足になって命に入るほうがよい。更に、もし片方の目がつまずかせるなら、えぐり出しなさい。両目がそろったままゲヘナに投げ込まれるよりは、一つの目になって、神の国に入るほうがよい。手が、足が、目が隣人に罪を犯させるなら、それらを切り捨てよ。蛆が尽きず、永遠に燃え続けるゲヘナの火に焼かれるよりは、体の一部を失っても、神の国の命に与るほうがよいではないか。主イエスは、小さい者をつまずかせることは、これほどに罪深いと警告しておられる。日本の任侠道では「弱きを助け、強きをくじく」と、強い権力者には反抗し、弱い民衆に味方するという威勢のいい言葉があった。最近では、弱い者をいじめ、強い者にこびる風潮がある。主イエスは生涯を一貫して、小さく弱い者を生かす神の思いを現された。そのことが、権力者たちの作り上げた体制を壊す者と見なされ、嫌われ、十字架の死へと追い込まれていった。この事実を凝視することが、主イエスの生涯の意味を知ること、時代の真と偽を見定める鍵となる。

「ゲヘナの火」という言葉からであろうか、「人は皆、火で塩気を付けられねばならない」と繋がっている。「塩は良いものである。」塩がなくなると、人間の命は保たれない。塩は他の食べ物の味を美味しく引き出し、また、腐敗を防ぐ。塩は不可欠な調味料である。「だが、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは何によって塩に味を付けるのか。」は、岩波訳では「何によってそれを味つけるだろうか」と、塩がなければ、食材に味付けできないと訳している。「自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ぎなさい」という言葉が核心で、狭量に、感情的に、争い合うのではなく、自分自身に塩を持ち、互いを受け入れ合って生きる和らぎの心を持ちなさいとの勧めである。